

避難しないと決めても、停電になる可能性は強い。ガス漏れが発生すれば、緊急避難しなければならない。わたしはまず懐中電灯を所定の場所に置き、ロウソクとマッチを用意した。水は大丈夫かしら。飲料水用に毎月届けて貰っている「ポールランド・スプリング・ウォーター」の五ガロン入りがまだひとつ残っていた。開いている五ガロンの瓶に水道水を入れておく。

もし、避難することになったら、ホテルはもういつぱいだろう。今晚だけでも誰かのアパートに泊めてもらおう手はずを整えておかなくてはならない。考えるまでもなく、十八丁目に住むマリコ・コーエンさんの家が最適だった。閉鎖ライン十四丁目のすぐ北だし、あそこにはゲスト用の寝室がある。ピートと建築家のコーエン氏も親しい。

「もちろん、いいわよ。でも、今晚、ニュージャージーに帰れなくなった友達泊まることになったから、ベッドが空いているかどうかわからないけれど……。床にマットでも敷けば、泊まれるわ。それで良かったら、いつでもどうぞ」

というマリコさんの快活な声が電話口に響く。こういう時、日本人ネットワークは頼もしく、本当にありがたい。

パストレインばかりでなく、地下鉄もすべて止まったという。北部ウエストチエスター郡や東部ロングアイランドへ向かう汽車の駅、グラント・セントラル・ステーションも、ペン・ステーションも閉鎖。トンネルも全部閉鎖。

トレード・センターからほんの数ブロック南東に位置するウォール街から、ミッドタウン四十七丁目国連ビルの中の建物はすべて緊急避難。政府関連のビルもすべて避難。

マンハッタンから、イースト・リバーを越え、ブルックリンやクイーンズ地区に帰宅する人びとは、イースト・リバーにかかるブルックリン・ブリッジやマンハッタン・ブリッジなどの橋を歩いて渡っている。どの橋も避難する人びとが列をなしている。

ケネディ、ラガーディアの両空港とニュージャージー州ニューアーク空港も9時過ぎから、全面閉鎖。旅に出ようと空港に集まった何万人もの人びとは、空港にくぎ付けになった。帰宅しようにも、交通手段もない。

「全米の飛行場はすべて閉鎖されました。アメリカ合衆国の歴史上初めてのことです」

キャスターの声がする。テレビでは各局コマーシャルなしの臨時ニュースを流している。CBS、NBC、ABCの三大ネットワークはもちろんのこと、ケーブルテレビのCNN、CNNヘッドラインニュース、ニューヨーク1、フォックス・ニュース、NEWS9、MSNBC、CNBCなど、少なくとも十局がライ

ブで報道している。

画面では貿易センタービルを襲った二機目のジェット機が、ニュージャージー側から回り込むようにして、南タワーに激突する瞬間を何度も映し出していた。あの巨大なタワーにぶつかると瞬間、パイロットは何のためらいもなく突っ込んでいく。まるで嬉々としてぶつかっていくようにも見える。

航空会社のパイロットだったら、あれほど確信をもって突っ込めないはずだ、と解説する声が聞こえた。テロリストが操縦桿を握っていたとしたら……恐ろしい事態が頭に浮かぶ。乗っ取られた機内の乗客とパイロット、搭乗員は、飛行機が異常な低空飛行をはじめ、ニューヨークに近づいたことを察知しただろうか。摩天楼が窓のすぐ下に広がり、快晴の空に立つ貿易センタービルが視界に入っただろうか。北タワーがすでに爆破され、火を噴いている姿を目撃した乗客はいただろうか。テロリストの意図を察知し、テロの巻き添えでさらに大きな被害を出すことを、何人かは、直感しただろうか。あるいは、何も知らず、恐怖のうちに道連れになったのか。

マスメディアも混乱していた。初めにワールド・トレード・センターへ突っ込んだ飛行機がアメリカン航空と報道した後で、違うチャンネルではユニテッド航空だといっている。ペンタゴンへ突っ込んだのはユニテッド航空なのか、アメリカン航空なのか、便名もまちまち。

「南タワーに続いて、北タワーも10時28分、崩壊しました」

キャスターの声に映像が続く。10時28分といえば、わたしが「ワーキング・プレス」パスをもってキャナル・ストリートに出ている頃だろう。北タワーも南タワーと同様、上部が爆発、それに押しつぶされるような格好で、まるで一階ずつつぶれるように、崩れ落ちていく。崩壊が地面に届いた瞬間、巨大な灰と残骸、粉塵などが、数ブロックにわたって巻き上がる。

しかし、ペンシルベニアのピッツバーグ近くに墜落したという飛行機は、一体、どうしたのだろうか。さつきどこかの局のリポーターが、米軍機によって撃墜されたのかもしれない、と報告していた。

ピートのキーボードを叩く音がいつもより大きい。まるで機関銃の発音音みたいだ。東京は深夜1時過ぎだったが、わたしは東京の姉に電話を入れた。回線はいつぱいで不通。姉や弟、甥、親しい友人に、Eメールで、無事であると伝えることにした。

*とにかく二人とも無事です

「9月11日11・26AM送信

From War Zone

速報

今朝、ドカーンという大きな音で目が覚めて、アパートに車でもぶつかっただかと思つたら、これが世界貿易センタービルの2回目の爆発でした。ピートがちょうど近くにいて、飛行機がWTCにぶつかるのを目撃していました。わが家はWTCからほんの12、13ブロックのところであり、この緊急事態ですぐに家を飛び出し、現場に向きました。ブロードウェイは緊急の警察の車や消防車がスピードを上げて突進し、逃げ出す人でいっぱい。よく晴れた青空に煙がもうもうと東へ向かつているのが見え、チェンバーズ・ストリートに来たときには、2本のWTCの上部近くが燃えているが見えました。現場近くのベッシー・ストリートへ行くと、警官が通行を止めていましたが、何とかうまく現場近くで全体像を見ることができました。道路には靴、カバン、朝食のパン、それに飛行機のものと思われる車輪までおっこつていて、火を噴いているWTCからは人が飛び降りていました。その瞬間にも、この災害で閉じ込められている人がたくさんいると思うと、余りに気の毒で、何とか助けてあげたいと思うばかり。30分ほど現場にいと9・55、突然、燃えていたWTCの上部が爆発しているのが、目に入りました。青空のなかで物凄い煙が落つこちる物体を光らせて、私たちのいるあたりへ襲ってくる。この時ほど、全速力で駆け出したことはこの数年ないくらい。ピートを見失ったので、心配しましたが、彼も大丈夫でした。帰宅してみると、ワシントンでもペンタゴンなどが爆破されたとのこと。もうこれはテロによる戦争状態です。とにかく、二人とも無事です」

ごく親しい数人に送るつもりで書いたメールだったが、送信の段階になって、アドレス帳にメールアドレスが登録されている知り合いにも一挙に送信することにした。さらに、知り合いのなかにトレード・センターで働いている人はいないかを思い起こし、アメリカ人の友人で夫がトレード・センターで働いているかもしれない数名にメールを送った。ペンタゴンで働く古くからの友人にも同様のメールを送信した。

わたしの仕事部屋は南向きに当たる。目の前に裏の建物が迫っていて、見晴らしは何もない。しかし、裏の建物の上には空が見える。わたしはキーボードを叩きながら、時々、視線を南の空に移した。火の粉が飛んでこないだろうか……。空の色はまだブルー。煙が北向きになったら、空の色もすぐ変わるだろう。

ピートの仕事部屋は北向きで、通りに面している。細長いロフトなので、南側のわたしの部屋とピートの部屋のあいだにリビングやダイニング・ルームがある。わたしは北側に飛んでいって、窓から外の様子を眺めた。何か不穏な動きがないか。たとえば、市警が避難勧告に来たとか、近くの住民がこぞって退去し始めるとか……。しかし、工事中の向かいの建物の前では、中国系の青年が呆然と通り

を眺めていた。緊迫した雰囲気はないが、窓の近くでは、少し、すすけた匂いがする。プラスチックが燃えたような匂い。

午後1時27分、ワシントンには非常事態宣言が出された。米海軍が空母USS ジョージ・ワシントンとジョン・F・ケネディをニューヨークに派遣したという。

CNNは、FBIの信頼できる情報によるとして、貿易センタービルに突っ込んだ二機とペンタゴンへ突撃した一機、およびペンシルベニアで墜落した計四機は、一連のテロ攻撃の一環としてハイジャックされたものであると報道した。

午後2時30分、米国防空局（FAA）は明水曜日東部時間正午まで、民間機の航空はすべて停止されたと発表。

CNNは、米国の同時テロの報に歓喜の声を上げるパレスチナ市民を映し出した。これまでパレスチナ市民に同情的だったわたしも、この映像にははらわたが煮え繰り返るような思いだった。オサマ・ビンラディンが今回の犯行に関与した可能性は七十五パーセントといていた報道が、いつの間にか九十パーセントに上がっている。米国は報復に出るだろう。戦争が始まる。それもイスラム急進派とのおぞましい戦争が。

*大統領は行方不明

午後2時49分、画面は転じ、ジュリアーニ市長の記者会見が生中継された。既に、朝の10時すぎに市長選予備選挙は延期になった、と発表している。救出作業の進捗状態を矢継ぎ早に報告し、行方不明になった消防士や警官、トレード・センター内に閉じ込められた人びとの数を発表している。

市長自身は一機目のジェット機がトレード・センターに突っ込んだ時、公用車で市庁舎に向かっていたという。ジョー・ロータ市長代理が貿易センタービル付近にいて、北タワーにジェット機が激突、爆破するのを目撃した。急遽、市長に連絡を取る。市長と市長代理は現場付近で落ち合い、対策を協議していた。

「その時、わたしはトレード・センター（南棟）が火に包まれるのをこの目で見たんです！ 大きな穴が空き、ビルから誰か飛び降りてくるのを見ていたのです」
ジュリアーニはいつもの早口で状況を説明した。市長は早速、現場から一ブロック半離れたパークリー・ストリーートの政府関連事務所に入り、そこから指示を出すことにした。この事務所では電話が使えたのである。

市長は三年前、市民の反発を買いながらも千五百万ドルの予算を投じ、WTC七号館に防弾ガラスに囲まれた緊急用シェルターを設置した。こういう緊急時には本部になるシェルターのはずだった。皮肉なことに千五百万ドルの新品シェルターは使えず、パークリー・ストリーートの事務所に飛び込んだという。

この事務所のなかで、市長は南タワーが崩壊する轟音に耳を覆った。机の下に潜るスタッフもいたほどの衝撃だった。それから全員がその事務所を出て北を指したという。記者会見がどこから生中継されているのか、わからなかったが、十四丁目以北に緊急対策本部を設けたのだろう。緊急時におけるジュリアーニ市長の冷静さ、迅速さ、そして実行力を見てみると、ほっとするものを感じた。多くのニュー Yorker が同じように安堵したに違いない。

同時に、わたしは市長が緊急避難の指示を出したように思った。確かジュリアーニは「十四丁目以南に住む住人は全員、避難するように」と言っていたように思える。

「ねえ、ジュリアーニは避難するように言っていないかった？」

テレビの前で電話していた夫に尋ねてみた。

「そんなこと言っていたかなあ？」

「確か、十四丁目以南は全員、緊急避難と言ったような気がしたけれど……」

「いや、ぼくは聞いていない」

わたしはもう一度、念を押してみたが夫は知らないと答え、「あと少しで終わる」と言うなり再びコンピュータに向かった。都合の悪いことは聞こえないのだろうか。避難しないと決めたものの、市長が命令しているとなれば、話は別だ。

赤十字が献血の呼びかけをしている。特にO型が不足しているという。わたしはO型なので献血に駆けつけたいが、指定された病院はすべて十四丁目以北だった。一度、閉鎖ラインを超えてしまうと、市警の「ワーキング・プレス」パスのないわたしは自宅に戻れなくなるので、献血は当分無理だろう。多くのニュー Yorker が献血に駆けつけている映像が続く。ニュー Yorker の連帯はすばらしい。午後3時55分、ホワイトハウスの広報担当カレン・ヒューズが記者会見を開き、

「大統領は無事である」

と発表した。記者の質問を遮り、

「大統領は現在、公表できない場所にいる」

とだけ答えると記者会見を終了させた。

フロリダ州サラソタの小学校を訪問していたジョージ・W・ブッシュは、同時テロが起こった朝9時すぎ、

「テロを許すことはできない」

と短い声明を出してから、大統領専用機エア・フォース・ワンに搭乗。突然、ルイジアナ州バークスデール空軍基地へ到着。次の声明を出した。

「あらゆる適切な安全手段がこまじられた。世界中の米軍にハイレベルの警告が通達された。アメリカ合衆国は犯人を探し出し、この卑劣な行動に関係する者を必ず罰する」

その後の大統領は行方不明なのである。ホワイトハウスの広報担当は、大統領の無事を発表するだけで、一体、どこに大統領がいるのか、明確にしない。

「ブッシュは何をしている。飛行遊泳なんかしている暇があるんなら、チェンバーズ・ストリートへやってこい！」

テレビに向かってピートが憤懣をぶつけている。エア・フォース・ワンで近くのニューアーク飛行場へ飛んでくれば、あとはヘリコプターで現場までほんの数分。大統領こそ、いまこの瞬間、巨大な煙を上げて燃え上がる貿易センタービル跡をしっかりと見ておくべきではないか。あの煙の匂いをかぎ、粉塵のなかで呼吸することによって、この国がどれほどの同時多発テロに襲われたかを直視することができる。同時に、崩れ落ちたタワーの下にいる生存者を救おうと救出作業に命をかけている救急隊の勇敢さや努力も少しはわかるうというものではないか。

*すつかり戦時中の気分

コラム執筆の終わった夫はお腹がすいたという。朝からほとんど何も食べていなかった。ランチタイムもとづくに過ぎている。冷蔵庫を開けても食べ物は何もない。わたしは一昨日の晩、サンフランシスコから帰ってきたところだった。昨日は溜まった雑用を片付けていたので、買い物にも行かなかった。戸棚にあったのはパスタとホールトマトの水煮缶だけ。わたしは仕方なくパスタを茹で、トマトソースを作るべく、ガスレンジに火をつけた。問題なくガスはついたが、さつきピートが言っていたように、ジュリアーニが地域の元栓を止めたかもしれない。とすると、元栓からこのアパートに至るガス管に残ったガスを使い切っているのだろうか。このトマトソースが仕上がる前に、残ったガスを使い終わってしまうかもしれない。

わたしの心配をよそに、パスタは茹で上がり、トマトソースも出来上がった。ピートがまたブロードウェイに出て「ニュー・ファンシー・フード」でベーグルを買ってきた。

「あそこが唯一開いている店だから、救急隊や警官が飲み物やサンドイッチを買いに集まっているよ。凄く混んでいて時間がかかってしまった」

パンはもうすつかり無くなったというが、キムさんがそつとベーグルを差し出してくれたという。ベーグルは昨日のものだろうか、ちよつと固くなっていた。贅沢は言えない。ベーグルが食べられるだけでも幸せというものだ。

「君が生きていてくれて本当に良かった！」

食卓につくとピートは、突然、感情が高まったのか、ほとんど泣き出さんばかりにつぶやいた。

「先にひとりで逃げちゃってごめんさい。本当に悪かったと思っている」

「いや、先に逃げたんじゃない。離れ離れになってしまったんだ」

「次は絶対、一緒に逃げるようにするわ」

彼の言葉に答えてこう口にしてから、わたしは本当に次はそうするだろうか、と考えていた。南タワーの爆発を見た瞬間、走り出した時は自分を守ることで一杯だった。振り返る余裕もなかった。もし、あの時振り返っていたら……。わたしはほとんど食欲がなかったが、固いベーグルを頬張った。何だかすっかり戦時中の気分になりながら、好物の Pasta を食べる夫を不思議なものを見るように眺めていた。それにしても、何故、ピートは現場近くにいたのだろうか。百三丁目にあるニューヨーク市歴史協会は、これから二年がかりで市庁舎に隣接する「ツイード・コート・ハウス」へ移転することが決まったばかりだった。実は、今朝のミーティングも百三丁目で行われることになっていた。しかし、たった三日前、「ツイード・コート・ハウス」に変更になった、というファックスを受け取ったのである。

彼が二機目のジェット機が南タワーにぶつかるところを目撃しなかったら、わたしも現場へ急行できなかっただろう。アパートからたった十三ブロック南で起こっている米国史上初めての同時多発テロ事件など知らず、寝坊していたなどという失態を演じていたかもしれない。いや、わたしがいくらのんびりしているとはいえ、確かにあの衝撃音で飛び起きたのだ。

「そうか、そんなに大きな音がしたのか……」

ピートは初めてわたしの話に耳を傾けた。ふたりで時間経過を追ってみた。多分、こんなことだったに違いない。

*あそこで誰かが死んだのだろう

9時3分、ピートはチェンバーズ・ストリートで南タワーの爆発を目撃、わたしは飛び起きる。

ピートは市警の「ワーキング・プレス」パスを持って現場へ来るよう、わたしに電話をかけようとしたが、どこの公衆電話にも長い列ができていた。急いで自宅へ帰るのに、多分、七、八分かかったはずだから、帰宅したのは9時15分頃。

ピートがデイリー・ニューズ社に電話を入れ、編集担当デスクと話していたのは、十分間前後。

二人で表に出たのが、9時25分くらい。

急いで歩いたから現場に着いたのは、恐らく9時40分頃。

テレビの報道によると、南タワーが崩壊したのが9時55分、あるいは別の報道では10時。ということは、ベッシー・ストリートとチャーチ・ストリートの角で、貿易センタービルの本のタワーが燃え上がるのを見ていた時間は、十五

分から二十分ということになる。

「あそこでは誰か、怪我したか、死んだのだろうかね」

ピートがこう言った。わたしはもう一度現場を頭に描いてみた。

「……誰かが、飛んできた飛行機のタイヤに当たったということかしら？」

「多分、そうだろう。チャーチ・ストリートに転がっていたタイヤには、外側のゴム製の部分もまだ残っていた」

わたしはそのタイヤを見ていなかった。チャーチ・ストリートの角へ向かって歩いていたら、わたしはピートのすぐ後ろにいた。女性警官が黄色いテープを貼って、わたしたちに二メートルほど下がるように命令したから、わたしは見る機会がなかったのである。

「ベッシー・ストリートのあの血痕は、タイヤに直撃された女性のものだろう。黒いハイヒールが落ちていたからね」

「そのほかに、男性ものの靴が何足か転がっていたし、男性のものらしい黒いカバンもあったから、被害者は彼女ひとりでなかったかもしれない……」

「ベッシー・ストリートにはコーヒーショップがあるだろう。きつとあそこで爆発音を聞いて、飛び出した瞬間、飛んできたタイヤにぶつかって倒れたのだろう。朝食用にパンを買って、紙袋を持って出てきたところに違いない。あのタイヤがどっちの飛行機のものかはわからないけれど」

よく思い起こしてみれば、きつとそんなことが起こったのだろうと思える。その直後、わたしたちは何も知らずにあそこへ立っていたことになる。

「あのタワーが崩れ落ちるなんて、考えもしなかった」

ピートはこう言うと、ニューヨーク市の歴史の本を集めた本棚から一冊を取り出して頁をめくった。

「ぼくが閉じ込められたのは、ベッシー・ストリート二十番地だった。あの古い建物の歴史がどこかに載っているかもしれない」

しばらくすると、彼は「ニューヨークAIAガイド」に捜していた建物を見つけたらしく、頁を開いて渡してくれた。そこにはベッシー・ストリート二十番地が載っていて、こう記されていた。

「ギャリソン・ビルディング、元ニューヨーク・イブニング・ポスト・ビルディング。一九〇六年建設」

何という運命の導きだろうか。ピートが新聞記者としてのスタートを切ったのは、「ニューヨーク・ポスト」紙に採用された時だった。二十五歳だったから、四十年前の一九六〇年のことである。その「ニューヨーク・ポスト」紙の前身が、「ニューヨーク・イブニング・ポスト」紙である。第二次大戦中に新聞名を変更し「ニューヨーク・ポスト」になったという。ということは、長く勤めた「ニューヨーク・ポスト」紙の前身にピートは助けられたことになる。